

急性期病院における外国人看護補助者の の受入れ事例

荒川 隆

(社会福祉法人恩賜財団済生会支部神奈川県済生会横浜市南部病院
MA 室 室長、地域医療連携室 事務責任者)

医療経営士2級
認定登録番号：
21410117010057

【目的】

採用困難職種である看護補助者として、ミャンマーから4人の外国人補助者を受け入れた。

その経過と現状について、他の医療機関の参考とさせていただくため、次の通り報告する。

【実施方法】

採用困難が続き、病棟業務、病院運営にボディーブローのようにダメージを与えていた看護補助者の採用を、紹介業者を通じてミャンマーから4名(20～23歳)の女性職員を特定技能制度の利用によって、採用し、受け入れを行った。MA室(メディカルアシスタント室)が紹介業者や人事担当部署との対応窓口となり、看護部が業務管理、生活支援など行う、といった共同・連携して体制を構築して受け入れ態勢を整えた。

【実施期間】

2024年10月から実施。現在も継続実施中。

【考察・結果】

- ・昨年1月に入職が決定して以降、居住場所や日用品の準備、院内への周知や勤務支援といった体制構築を進めて、昨年10月1日に入職した。
- ・現在に至るまで、大きな問題もなく順調に推移している。
- ・4人を受け入れ準備を行う段階で、勤務をする病棟や関連する部署だけではなく、病院全体で基本業務や伝え方などの見直しを行った。4人を受け入れた病棟では、彼女たちの成長を見守る雰囲気

が生まれ、それが職員同士を支援しあう心遣いとなって、当該病棟の離職率の低下にもつながっている。平均在院日数が平均約8.0日で多忙な病棟勤務であるが、無遅刻無欠勤で元気に働く4人の姿は、病棟運営、病院経営にも好影響を与えている。

- ・今年度も採用準備を進めており、4名の入職を予定している。

【共同研究者】

千田祥子、皆川潤治郎

損害保険会社(自動車事故担当)勤務時に、受傷者の経過の違いから「医療の質」を知り、済生会(本部事務局)へ転職。経理、経営管理、社会福祉の部署に勤務し、横浜市南部病院へ出向。医大付属病院、民間医療法人を経て、済生会横浜市東部病院勤務。昨年より現職。